

# endnotesj.sty v3.0-beta1

## 日本語論文用 後註生成マクロ for p<sub>L</sub>A<sub>T</sub>E<sub>X</sub> 2<sub>ε</sub>

小川 弘和（熊本学園大学経済学部）

modified by 山下 弘展

2018/05/13

日本史・国文学関係論文作成に必要な、縦型の“(連数字)”形式註番号および、複数行にわたる註部分テキストの2行目以降を、先頭行テキスト開始位置に揃える表記を可能とした、後註生成マクロです。縦組論文での使用を意図して作成していますが、横組論文でもそのまま使用可能です。

このバージョン (v3.0-beta1) は、旧版との互換性を極力維持しつつ、内部マクロを本家 (endnotes.sty) 最新版に合わせて更新し、さらに機能拡張を施したものです。旧版同様に p<sub>L</sub>A<sub>T</sub>E<sub>X</sub>/up<sub>L</sub>A<sub>T</sub>E<sub>X</sub> で動作することに加え、Lua<sub>L</sub>A<sub>T</sub>E<sub>X</sub> (Lua<sub>L</sub>A<sub>T</sub>E<sub>X</sub>-ja) にも対応しています。最新版は GitHub リポジトリ

<https://github.com/aminophen/endnotesj>

で管理しています。

## 1 コマンド・マニュアル

コマンド自体はオリジナルである endnotes.sty と同じです。

- `\endnote{註}`

本文中に挿入することで自動的に、`{}`に挟まれたテキストを、連番を付した後註として扱います。つまり、このコマンドの埋め込まれた位置の本文肩に註番号を生成するとともに、後に解説する `\theendnotes` コマンドによって、`{}`に挟まれたテキストの冒頭に同様の番号を付したうえで、後註として列挙するわけです。

- `\endnote[数字]{註}`

`[数字]` 部分に任意の数字を埋め込むことで、数字で指定した数を註番号とする後註を生成します。このコマンドによって生成された註は、上記 `\endnote{註}` によって生成される註とは別グループとして扱われるため、そちらの番号に影響を与えることはありません。よって表記を改良すれば補注用として利用可能ですが、現状では通常の註と同スタイルのため紛らわしいので、使用は勧められません。

- `\endnotemark[数字]`

実際には後註を生成せぬままで、本文肩に任意の註番号を生成します。また、`[数字]` オプションを用いた場合、以降の註番号は任意の番号にスキップしたうえで生成されていくことになります。

- `\endnotetext[数字]{註}`

番号を表立って表記せぬ後註を生成します。このコマンドの場合でも、内部的には註番号はカウントさ

れています。なお [数字] オプションの機能は`\endnotemark` と同様です。

- `\theendnotes`

本文中に挿入することでその位置に、それまで`\endnote` 等のコマンドによって生成された後註を列挙表示します。なお、`\setcounter{endnote}{0}` コマンドを用いると、その後の註番号が再び (1) より開始されますので、本コマンドとの組合せによって、容易に章・節ごとの後註が作成できます。

## 2 パッケージ・オプション

次に、パッケージのオプションを説明します。これらは `endnotesj.sty` 独自のものです。

### 2.1 注釈印の書式

プリアンブルで

```
\usepackage{endnotesj}
```

とすることで、縦組用の“(連数字)”型注(『日本史研究』等の形式。本文中では、注挿入指定位置直前の文字の直上に注 No. を配置する。)が使用可能に、

```
\usepackage[yoko]{endnotesj}
```

とすることで、横組用の“(数字)”型注(本文中では、注挿入指定位置直前の文字の直後上方に、ほぼ 1/4 倍角で注 No. を配置する。)が使用可能に、

```
\usepackage[single]{endnotesj}
```

とすることで、横組用の“(数字)”型注(『歴史学研究』等の形式。本文中では、注挿入指定位置直前の文字の直後上方に、ほぼ 1/4 倍角で注 No. を配置する。)が使用可能になります。

### 2.2 otf パッケージを用いた注釈印の書式

otf パッケージをインストールしてある環境であれば、注番号の数字に詰数字を用い、より奇麗に表示可能です。この機能を使うには

```
\usepackage[otf]{endnotesj}
```

と指定します。otf は v3.0 で新設されたオプションで、旧バージョン v2.1 にあった `utf` も同じ意味になります。

このオプションを指定すると、`otf.sty` および `ajmacros.sty` で定義されている `\UTF・\ajTumesuji` コマンドに動作が依存します。そのため、これらのパッケージを自動で読み込みます\*1。このため、別途これらのパッケージを `\usepackage` する必要はありませんが、`otf.sty` の各種オプション (`expert` など) を用いたい場合は `endnotesj.sty` より前に指定してください。

---

\*1 古い環境で `utf.sty` および `utfmacro.sty` しか利用できない場合は、これらにフォールバックします。

## 2.3 後注列挙部分のタイトル

ここまでの節で紹介したオプション以外が`\usepackage`のオプションに指定された場合は、それを後注列挙部分のタイトルとして用います。たとえば、

```
\usepackage[注]{endnotesj}
```

オプションで、文末の後注列挙部分の先頭に「注」、

```
\usepackage[註]{endnotesj}
```

オプションで「註」と表記されます（v2.1 以前は「注」と「註」のみサポートしていましたが、v3.0 以降は「注釈」や「後註」なども自由に指定できます）。オプション無指定の場合には、何も表記せぬまま、注が列挙されていきます。

## 3 行数・桁数指定マクロ

`endnotesj.sty` には、『 $\text{\LaTeX}$  スタイル・マクロ ポケットリファレンス』（技術評論社）、いわゆるポケリで紹介されている行数・桁数指定マクロも組み込んであり、使用することが可能です。用紙サイズにあわせて自動的に字間配置を調整する  $\text{\TeX}$  には本来は、行数・桁数指定は馴染まないのですが、投稿規定上、行数・文字数を固定する必要がある場合に用いてください。

基本的な記述法は以下の通りです。

```
\kcharparline{30}  
\begin{document}  
\linesparpage{20}
```

`\kcharparline{30}`が、用紙縦方向の文字数指定。この場合、30 文字に指定しています。なお、このコマンドはブリアンプルで指定します。

`\linesparpage{20}`が、用紙横方向の文字数指定。ここでは、20 文字に指定しています。こちらは本文で指定するか、`\AtBeginDocument{}`に入れて使用します。

## 4 旧版（v2.1 以前）との違い

旧版（v2.1）から v3.0 での変更点は、以下のとおりです。

- パッケージのコード本体から ASCII 文字以外を排除。
- 後註内部マクロを最新の `endnotes.sty`<sup>\*2</sup>ベースに更新。これにより、例えば本文中で合印直前で行分割することがあった問題が解決しました。
- パッケージのオプションを拡張。組方向（縦・横）に応じて適切な注の印が出る `auto-tateyoko` を新設し、これをデフォルトに設定しました。また、「注」「註」以外のタイトル形式を可能になりました。
- もし本家パッケージ (`endnotes.sty`) が存在する場合で、`endnotesj.sty` が読み込まれた時点で未読み込み

---

<sup>\*2</sup> Date of this version: 15 January 2003.

ならば、読み込み済み扱いするようにした（そうしないと、後で意図せず読み込まれて、日本語対応コードが上書きされるかもしれないため。）

- `\linesparpage` の修正（行間の数ではなく行数で割っていたため、行数が合わないことがありました。また、`\topskip` の分を差し引いておらず、正しい行間隔になっていませんでした。）

## 5 実際のスタイル見本（日本語版）

スタイル見本は GitHub の `samples` ディレクトリを参照してください。